

# 愛媛大学生と松山大学生の 結婚観の差に関する研究

曾我 亘 由<sup>†</sup> 熊谷 太 郎<sup>\*</sup>

## 1 はじめに

近年、日本では少子化が問題となっている。その要因としては、女性の社会進出、男性の就業率や賃金の低下、また社会的な選好の変化などが挙げられている。愛媛県の合計特殊出生率の傾向は、全国と同様である（表 1）。

表 1：日本と愛媛県の合計特殊出生率の推移

	全 国	愛媛県		全 国	愛媛県
1950年	3.65	4.03	1995年	1.42	1.53
1960年	2.00	2.10	2000年	1.36	1.45
1970年	2.13	2.02	2005年	1.26	1.35
1975年	1.91	1.97	2006年	1.32	1.37
1980年	1.75	1.79	2007年	1.34	1.40
1985年	1.76	1.78	2008年	1.37	1.40
1990年	1.54	1.60	2009年	1.37	1.41

(注) 沖縄県については、1975年から含まれている。

<sup>†</sup> 愛媛大学法文学部准教授

<sup>\*</sup> 松山大学経済学部准教授

少子化による経済的な影響として、(1)労働力人口が減少し経済成長の妨げとなる、(2)社会保障の現役世代の負担が大きくなる、などが考えられる。また、社会的な影響としては、(1)親の過保護が進み子供への干渉が過度になる、(2)子供どうしの交流機会が減りコミュニケーション能力の養成が進まない、などが考えられる。そのため、政府や自治体は少子化対策に取り組み始めている。政府は、高校の無償化や子ども手当といった制度を新たに導入し、子育ての補助となる政策を実行している。そして、特に都市部における保育施設の不足問題を解決するために、幼保一体化の施設を創設しようとしている。愛媛県では、世代育成支援対策推進法（平成15年7月16日法律第120号）に基づいて、平成17年度から5年間にわたって、『子どもがすこやかに成長し、安心して子育てができ、地域が一体となって子育てをする』ということを目標として、「えひめ・未来・子育てプラン」を平成17年3月に策定し実施した。その結果、保育所の定員数が増加し、地域子育てセンターが増設され、子育て学習講座や理解講座が実施されるなどの成果が得られている。

さらに、愛媛県では全国に先駆けて2008年11月からえひめ結婚支援センターが開設された。結婚支援センターでは、企業団体がNPOや市町等と連携しながら、未婚の男女を対象として結婚支援イベントを行い、未婚の男女を引きあわせ、交際をフォローすることによって、結婚を支援する事業を行っている。また、メールマガジンで結婚支援イベントの情報を発信し、より多くの人に出会いの場を提供したり、セミナーを行うことによって、性別を超えた自分磨きの場を提供している。

愛媛県の取り組みの多くは、結婚支援センターを除いて出産・育児をしやすい環境づくりという意味で、主に既婚者や子どものいる家庭向けの少子化対策が中心である。愛媛県内における合計特殊出生率は表1より2005年以降上昇傾向にある。ところが、愛媛県では男女ともに各世代の未婚率が上昇している（表2および表3）。

表2：愛媛県の未婚率の推移（男性）

	25～29歳	30～34歳	35～39歳		25～29歳	30～34歳	35～39歳
1970年	37.8	8.2	3.7	1990年	58.4	27.5	16.4
1975年	41.5	10.1	5.0	1995年	61.2	32.9	19.6
1980年	50.0	17.0	5.8	2000年	63.5	38.0	23.4
1985年	54.9	23.6	11.6	2005年	65.1	42.2	28.5

表3：愛媛県の未婚率の推移（女性）

	25～29歳	30～34歳	35～39歳		25～29歳	30～34歳	35～39歳
1970年	17.7	6.6	5.2	1990年	38.1	13.1	7.6
1975年	20.9	9.7	5.1	1995年	46.3	19.1	9.8
1980年	23.0	9.3	5.7	2000年	51.0	25.6	14.0
1985年	29.1	10.3	7.0	2005年	55.0	30.2	18.7

これらの事実から、結婚すれば子どもを産み育てている家庭が多いことがわかる。すなわち、県内における合計特殊出生率の低下は、有配偶率（婚姻率）の低下が大きな要因であると考えられることができる<sup>1)</sup>。したがって、少子化対策として既婚者向けの対策だけではなく、未婚者が結婚をするようなインセンティブを与え、結婚しやすい環境を与えるような政策を実施することも重要となる。特に、若者が結婚に希望を持つことができるような環境を作っていくことが重要になってくると考えられる。

本稿では愛媛県内でも規模の大きい愛媛大学と松山大学の学生にアンケート調査を行い、結婚相手に何を求めるのかを検証する。今回のアンケートでは、属性を顔、性格、体型、学歴、料理、そして所得に分類し、それぞれどの項目を結婚相手に求めるかをコンジョイント分析と呼ばれる選択型実験を行い明らかにする。最初に愛媛大学生と松山大学生にデータを分け、どの属性に関して

1) 有配偶率（婚姻率）とは、人口1000人あたりの結婚件数のことである。

差があるかを検証する。そして、男性データと女性データに分類し、両大学での属性に差があるかを考察する。また、これらの分析では明示的に選好の多様性を表現できる混合ロジットモデル (Mixed Logit Model : ML) を用いる。

遠藤他 (1990a、1990b)、今井・森田 (1996) では、大学生を対象にした結婚に関する意識調査を行っている。このうち遠藤他 (1990a) では、大学生の相性特性を分析しており、特に男子学生の実態が女子学生の理想像と差があり、その項目は多岐にわたっていることを明らかにしている。また、遠藤他 (1990b) では『夫は仕事をし収入を得て、妻は家庭を守る』という旧来の役割分担意識は男性のほうが強いことを明らかにした。さらに、夫婦間のコミュニケーションについても男性のほうが『夫を上位に立たせたい』という項目が女性よりも強いことがわかった。しかし、1990年時点では、収入と家事の完全な共同分担を男女ともに求めておらず、大学生の結婚観に新しい傾向は求められていないことが明らかとなった。今井・森田 (1996) では、女子学生は男性に経済力を求めていることを明らかにした。佐野他 (2007) では、大学生を対象にアンケート調査を行い、性役割志向と理想の結婚の間にどのような関係があるかを調べた。男性は、育児は積極的に行おうと考えているが、家事はしたくないと考えており、結婚相手に家庭的な面を求める傾向があることを明らかにした。中井 (2000) では、立命館大学産業社会学部の女子学生を対象に、結婚観を規定しているメカニズムを構造方程式モデルを用いて検証し、結婚観にはライフコース観が結婚観と性役割観を繋ぐ媒介的な役割を果たしていることを明らかにした。また、望ましい結婚相手に関する分布として、エリート志向よりも家事育児に協力的で、仕事の継続を認める人を重視していることを明らかにした。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第2節ではモデルを説明する。第3節では分析結果を概観し、第4節で愛大生と松大生の結婚相手に求める属性について考察する。最後に、結果のまとめと今後の課題を記述する。

## 2 選択型実験とモデル

本研究で採用した選択型実験は、コンジョイント分析とよばれ、計量心理学の分野で誕生し、その後はマーケティングや交通工学、環境経済学で発展・応用してきた手法である。コンジョイント分析では、回答者に対して複数の選択肢を提示し、それらに対する回答者の評価を観ることで、選択肢における相対的な重要性を明らかにすることができる。1つ1つの選択肢を構成するものを「属性」と呼び、属性がとりうる値のことを「水準」と呼ぶ。そして各属性と各水準の組み合わせとして表現される選択肢を「プロファイル」と呼ぶ。このプロファイルを組み合わせを回答者に提示し、最も望ましいものを選んでもらうという形式をとる。

この選択型実験はランダム効用モデルという概念に基づいて分析される。McFadden (1974) は、この誤差項に第一種極値分布を仮定することで、回答者が  $J$  個の選択肢から  $i$  を選ぶ確率が、条件付きロジットモデルに従うことを示した。しかし、条件付きロジットモデルは(i)選好の同質性 (Homogeneous Preference) と(ii)無関係な選択肢からの独立性 (Independence from Irrelevant Alternatives : IIA) の制約的な仮定が必要であることが知られている<sup>2)</sup>。そこで、Revelt and Train (1998) が提案した2つの制約的な仮定を緩和する混合ロジットモデル (Mixed Logit model : ML) を用いて分析を進める。MLでは、回答者  $k$  が選択肢  $i$  を選択したときのランダム効用関数を

$$U_{ki} = V_{ki}(\beta_k) + \varepsilon_{ki} = \sum_{n=1}^N \beta_k^n x_{ki}^n + \varepsilon_{ki} \quad (1)$$

2) IIAの問題点として、ある2つの選択肢の選択確率の比は、その一方の選択肢と完全に代替的な新たな選択肢が加わった後でも一定であることを意味している。代表的な例として、「赤バス青バス問題」を引き起こすことが知られている。また、選好の同質性を仮定しているCLは、推定される効用パラメータは、すべての人で同一の定数となる。すなわち、各属性のある水準から得られる部分効用が個人間やグループ間を通して同一であることを意味する。結婚相手に望む条件は個人間で異なると予想されるため、選好の同質性はかなり制約的な仮定と考えることができる。

と表す。ただし、 $\varepsilon_{ki}$  は独立同一に第一種極値分布に従うと仮定する。(1)式より、個人で異なる選好を持つということがモデル化されている。またMLでは、回答者  $k$  の選択確率を

$$P_{ki} = \int \prod_{t_1}^T \frac{\exp(V_i)}{\sum_{j=1}^J \exp(V_j)} f(\beta|\Omega) d\beta \quad (2)$$

と定式化する。(2)式で、 $T$  は選択型実験の反復回数を表している。通常の選択型実験では、同じ回答者に数回の反復質問を行う。また、 $f$  は  $\beta$  の確率密度関数、 $\Omega$  は  $\beta$  の平均や分散などのパラメータを表している。

先述のとおり、選択肢はプロフィールと呼ばれており、適切な実験計画法によって、属性の相関を完全に削除することができる。本研究では、主効果直交デザインを用いている。これにより、多重共線性を完全に回避することができるという長所がある。本研究では、以下の表4で示すような属性と水準の設定を行っている。なお、選択型実験では、通常価格属性を設定するが、本研究で

表4：属性の種類と水準

属性	水準1	水準2	水準3	水準4
顔	Level 1	Level 2	Level 3	—
性格	明るく優しい	自分勝手だが明るい	優しいが暗い	自分勝手に暗い
体型	細め	普通	太め	—
学歴	大卒 (一流大学)	大卒 (普通の大学)	高卒	—
料理	上手	下手	—	—
所得	1,000万円	600万円	300万円	—

は価格を仮想的な相手の所得（年収）として設定した。

主効果直交デザインによって、25プロフィールを作成し、そこからランダムに選ばれた2つのプロフィールと、どちらも結婚相手として選択しないことを

意味する、「選択しない」を組み合わせた選択セットを作成した。以下の表5に、選択セットの例を示す。

表5：選択セットの例

属性	人物A	人物B	
顔	Level 1	Level 1	
性格	自分勝手だが明るい	優しいが暗い	
体型	普通	細め	どちらも
学歴	大卒（一流大学）	高卒	選択しない
料理	上手	下手	
所得	600万円	600万円	

上記のような選択セットを回答者に提示し、最も望ましい仮想的な相手を選択してもらうこととした。なお、回答者には8つの選択セットを提示して反復質問（ $T=8$ ）を行っている。

### 3 調査概要

本研究におけるデータは、2010年7月に愛媛大学と松山大学の講義中に収集した<sup>3)</sup>。サンプル数は、愛媛大学と松山大学合計で716人である。

表6に本調査の記述統計量を示す<sup>4)</sup>。

3) 愛媛大学における講義は法文学部の情報産業論、松山大学における講義は、経済学部  
の1回生対象のミクロ経済学入門、2回生対象の経済政策論Ⅰと経済基礎演習、3回生以  
上対象の公共経済学、そしてそれぞれ3回生と4回生対象の演習Ⅱと演習Ⅲ、経営学部  
の経済学Ⅰである。

4) 単位は人数である。また、無回答があるため、総回答数と一致しない項目がある。

表6：記述統計量

大 学	愛媛大学	177
	松山大学	539
付き合った経験	あ る	516
	な い	192
男 性	愛 大	87
	松 大	370
女 性	愛 大	90
	松 大	164
県内出身者	愛大・男性	45
	愛大・女性	55
	松大・男性	238
	松大・女性	146
県外出身者	愛大・男性	42
	愛大・女性	35
	松大・男性	131
	松大・女性	18
交際経験あり	愛大・男性	60
	愛大・女性	61
	松大・男性	267
	松大・女性	128
交際経験なし	愛大・男性	26
	愛大・女性	28
	松大・男性	102
	松大・女性	36
現在交際中	愛大・男性	23
	愛大・女性	24
	松大・男性	90
	松大・女性	57
現在交際していない	愛大・男性	34
	愛大・女性	35
	松大・男性	169
	松大・女性	66

記述統計量を概観すると、交際経験の有無は結婚観に対して何らかの影響を与えると考えられるが、異性との交際経験にはばらつきが見られる。そのため、結婚に対する価値観がばらつく可能性がある。

分析において、選択肢特有定数項 (Alternative Specific Constant: ASC) を導入している。分析では選択肢 3 に導入されている。すなわち本研究の設定では、ASC が負に有意に推定された場合、選択肢 1 もしくは 2 を好む、すなわち現時点での結婚に対して肯定的であることを意味する。アンケート対象者が大学生ということもあり、ASC 3 は正で推定されることが予想される。

## 4 推定方法と推定結果

### 4.1 推定方法

分析は次のように実施した。最初に、(1)愛媛大学の学生 (以下、愛大生) であるときに 1 を取るダミー変数 (以下、愛大ダミー) と属性変数の項 (以下、クロス項) を追加することで、愛大生と松山大学生 (以下、松大生) との間に、結婚相手に求める属性に差があるかについての検証を行う。次に、(2)男子学生をプールしたデータ、(3)女子学生をプールしたデータの分析を実施した。(2)と(3)では、(1)と同様に愛大ダミーと属性変数のクロス項で分析を行う。

### 4.2 推定結果

#### 4.2.1 愛大生と松大生の結婚観

まず、愛大生と松大生の結婚観について概観する。愛大生と松大生の結婚観についての結果は表 7 にまとめられている。すべての属性パラメータについて、正で有意に推定されている。したがって、愛大生も松大生も共にどの属性パラメータも相手の条件として重要と考えていることが伺える。

顔や性格、学歴 (大卒 (一流大学))、料理については選好にばらつきがあり、とても重要視するという学生からそれほど重要視しない学生まで選好に多様性がある。体型や学歴 (大卒 (普通大学)) については、選好に多様性がな

表7：愛大生と松大生の結婚観の差の推定

	Coefficient	t-value	P-value
Random - non random parameter			
Level 2	1.663	15.604	0.000
Level 2 ×愛大ダミー	<b>0.411</b>	<b>2.002</b>	<b>0.045</b>
Level 3	2.549	17.347	0.000
Level 3 ×愛大ダミー	<b>-0.030</b>	<b>-0.109</b>	<b>0.914</b>
明るく優しい	4.392	21.193	0.000
明るく優しい×愛大ダミー	0.422	1.556	0.120
自分勝手だが明るい	1.989	11.232	0.000
自分勝手だが明るい×愛大ダミー	0.520	1.674	0.094
優しいが暗い	2.452	11.730	0.000
優しいが暗い×愛大ダミー	<b>0.377</b>	<b>1.092</b>	<b>0.275</b>
細め	<b>1.564</b>	<b>12.608</b>	<b>0.000</b>
細め×愛大ダミー	-0.095	-0.390	0.697
普通	<b>1.595</b>	<b>13.509</b>	<b>0.000</b>
普通×愛大ダミー	<b>-0.269</b>	<b>-1.192</b>	<b>0.233</b>
大卒（一流大学）	0.420	3.992	0.000
大卒（一流大学）×愛大ダミー	0.229	1.165	0.244
大卒（普通大学）	<b>0.358</b>	<b>3.279</b>	<b>0.001</b>
大卒（普通の大学）×愛大ダミー	0.793	3.487	0.001
料理が上手	1.144	10.977	0.000
料理が上手×愛大ダミー	<b>-0.550</b>	<b>-2.950</b>	<b>0.003</b>
所得	0.003	14.039	0.000
所得×愛大ダミー	<b>0.000</b>	<b>-1.425</b>	<b>0.154</b>
ASC 3	5.966	20.889	0.000
Standard deviation parameter			
Level 2	0.307	2.022	0.043
Level 3	1.550	10.178	0.000
明るく優しい	1.039	6.550	0.000
自分勝手だが明るい	1.034	5.319	0.000
優しいが暗い	1.282	6.917	0.000
大卒（一流大学）	0.387	1.570	0.117
料理が上手	0.995	8.694	0.000
所得	0.001	5.515	0.000
明るく優しい×愛大ダミー	0.592	1.465	0.143
自分勝手だが明るい×愛大ダミー	0.181	0.366	0.715
細め×愛大ダミー	0.727	1.930	0.054
大卒（一流大学）×愛大ダミー	0.082	0.220	0.826
大卒（普通の大学）×愛大ダミー	0.705	2.212	0.027
ASC 3	2.178	15.216	0.000
No. of Obs.	5668		
Log-Likelihood	-3465.244		

注：表中の太字は固定パラメータを表す。

く回答者は同程度に重要であると考えていることがわかる。

性格（自分勝手だが明るい）、学歴（大卒（普通大学））、顔（Level 2）、料理（上手）については、愛大生と松大生に有意な差がある。前者3つの属性パラメータについては愛大生の方が、料理（上手）については松大生のほうが結婚相手の条件として重要であると考えている。学歴（大卒（普通大学））については標準偏差パラメータが有意に推定されているので、選好に多様性があることがわかる。したがって、愛大生は学歴（大卒（普通大学））を松大生よりも重要視するが、その程度にはばらつきがあると考えられる。顔（Level 2）と性格（自分勝手だが明るい）については、標準偏差パラメータは有意に推定されていないことから、選好に多様性はない。料理（上手）については、松大生のほうが愛大生よりも重視するものの、選好に多様性があるという意味では同質であると考えられる。

顔（Level 3）、性格（明るくて優しい）、性格（優しいが暗い）、所得については松大生と愛大生に有意な差はないが、標準偏差パラメータが有意に推定されているため、選好に多様性がある。

#### 4.2.2 愛大男性と松大男性の結婚観

愛大男性と松大男性の結婚観についての結果は表8にまとめられている。属性パラメータについては、学歴以外全て正で有意に推定されている。したがって、松大生は学歴以外は結婚相手の条件として重視しており、固定パラメータとして推定されることから、この考えは一樣であると言える。愛大ダミーについては、性格（優しくて明るい）、学歴（大卒（普通大学））が正、料理（上手）が負で有意に推定されている。すなわち、愛大生は性格（優しくて明るい）と学歴（大卒（普通大学））については松大生よりも結婚相手に強く求めていることを意味している。料理については、松大生のほうが強く求めていることを意味している。

標準偏差パラメータについては、学歴（大卒（一流大学））以外はすべて有意に推定されているので、選好に多様性があることがわかる。また、愛大ダ

表8：性別に関する愛大生と松大生の結婚観の差の推定

男性・大学差				女性・大学差			
	Coefficient	t-value	P-value		Coefficient	t-value	P-value
Random - non random parameter				Random - non random parameter			
<b>Level 2</b>	<b>1.903</b>	<b>14.145</b>	<b>0.000</b>	<b>Level 2</b>	<b>1.437</b>	<b>7.206</b>	<b>0.000</b>
Level 2 × 愛大	0.152	0.509	0.611	<b>Level 2 × 愛大</b>	<b>1.077</b>	<b>3.098</b>	<b>0.002</b>
Level 3	3.099	15.966	0.000	Level 3	1.854	7.218	0.000
Level 3 × 愛大	0.051	0.086	0.931	Level 3 × 愛大	1.004	2.357	0.018
明るく優しい	4.136	16.778	0.000	明るく優しい	5.459	12.314	0.000
<b>明るく優しい × 愛大</b>	<b>0.887</b>	<b>2.118</b>	<b>0.034</b>	<b>明るく優しい × 愛大</b>	<b>0.258</b>	<b>0.573</b>	<b>0.567</b>
自分勝手だが明るい	1.749	8.461	0.000	自分勝手だが明るい	3.084	8.824	0.000
<b>自分勝手だが明るい × 愛大</b>	<b>0.567</b>	<b>1.359</b>	<b>0.174</b>	<b>自分勝手だが明るい × 愛大</b>	<b>0.177</b>	<b>0.395</b>	<b>0.693</b>
優しいが暗い	2.551	10.344	0.000	優しいが暗い	2.392	5.569	0.000
優しいが暗い × 愛大	0.548	1.107	0.268	<b>優しいが暗い × 愛大</b>	<b>0.736</b>	<b>1.235</b>	<b>0.217</b>
<b>細め</b>	<b>1.808</b>	<b>11.497</b>	<b>0.000</b>	細め	1.505	5.652	0.000
細め × 愛大	0.080	0.218	0.828	<b>細め × 愛大</b>	<b>0.188</b>	<b>0.465</b>	<b>0.642</b>
<b>普通</b>	<b>1.793</b>	<b>11.701</b>	<b>0.000</b>	普通	1.612	6.417	0.000
普通 × 愛大	-0.126	-0.344	0.731	<b>普通 × 愛大</b>	<b>-0.180</b>	<b>-0.478</b>	<b>0.633</b>
大卒（一流大学）	0.177	1.383	0.167	<b>大卒（一流大学）</b>	<b>1.004</b>	<b>4.883</b>	<b>0.000</b>
大卒（一流大学） × 愛大	-0.125	-0.408	0.683	<b>大卒（一流大学） × 愛大</b>	<b>0.416</b>	<b>1.315</b>	<b>0.188</b>
大卒（普通大学）	0.130	0.895	0.371	大卒（普通大学）	0.667	2.972	0.003
<b>大卒（普通の大学） × 愛大</b>	<b>0.596</b>	<b>1.712</b>	<b>0.087</b>	<b>大卒（普通の大学） × 愛大</b>	<b>1.367</b>	<b>3.345</b>	<b>0.001</b>
料理が上手	1.397	10.640	0.000	料理が上手	0.774	4.057	0.000
<b>料理が上手 × 愛大</b>	<b>-0.501</b>	<b>-1.828</b>	<b>0.068</b>	料理が上手 × 愛大	-0.309	-1.034	0.301
所得	0.002	8.713	0.000	所得	0.005	9.347	0.000
所得 × 愛大	-0.001	-1.143	0.253	所得 × 愛大	-0.001	-1.588	0.112
ASC 3	5.648	16.281	0.000	ASC 3	7.334	11.400	0.000
Standard deviation parameter				Standard deviation parameter			
Level 3	1.578	6.988	0.000	Level 3	0.798	2.261	0.024
明るく優しい	1.085	6.328	0.000	明るく優しい	1.391	4.641	0.000
自分勝手だが明るい	0.888	3.698	0.000	自分勝手だが明るい	0.513	1.381	0.167
優しいが暗い	0.886	3.225	0.001	優しいが暗い	1.842	5.472	0.000
大卒（一流大学）	0.489	2.489	0.013	細め	0.747	2.803	0.005
大卒（普通大学）	0.738	2.828	0.005	普通	0.393	1.618	0.106
料理が上手	1.129	7.627	0.000	大卒（普通大学）	1.186	4.334	0.000
所得	0.002	5.347	0.000	料理が上手	0.868	4.096	0.000
Level 2 × 愛大	0.503	1.444	0.149	所得	0.002	5.411	0.000
Level 3 × 愛大	2.439	3.933	0.000	Level 3 × 愛大	1.148	2.377	0.018
優しいが暗い × 愛大	0.710	1.432	0.152	料理が上手 × 愛大	0.168	0.417	0.677
細め × 愛大	0.968	2.026	0.043	所得 × 愛大	0.001	2.652	0.008
普通 × 愛大	0.708	2.065	0.039	ASC 3	2.671	9.601	0.000
大卒（一流大学） × 愛大	0.031	0.064	0.949				
所得 × 愛大	0.001	2.159	0.031				
ASC 3	2.466	12.567	0.000				
No. of Obs.	3637			No. of Obs.	2031		
Log-Likelihood	-2137.901			Log-Likelihood	-1234.262		

注：表中では、愛大ダミーを愛大と表記する。  
太字は固定パラメータを表す。

ミーの標準偏差パラメータについては、顔（Level 2）と性格（優しいが暗い）以外は有意に推定されている。したがって、この2つの愛大ダミー以外は選好に多様性があることを示している。

#### 4. 2. 3 愛大女性と松大女性の結婚観

愛大女性と松大女性の結婚観についての結果も表8に掲載している。属性パラメータについては、全て正で有意に推定されている。顔（Level 2）と学歴（大卒（一流大学））については固定パラメータとして推定されたことから、選好に多様性がないことが言える。さらに、性格（わがままで明るい）以外の標準偏差パラメータについては有意に推定されているので、選好に多様性があると言える。体型が普通以外の属性パラメータについては、選好に多様性があることがわかる。愛大ダミーについて、顔（Level 2）、顔（Level 3）、学歴（大卒（普通大学））は正で有意に推定されていることから、顔と大卒（普通大学）については、愛大女性のほうが松大女性よりも重視する傾向にあることが言える。また、これらの属性パラメータのうち、顔（Level 3）だけが選好に多様性がある。

## 5 考 察

最初にASC 3に注目する。どのケースにおいても属性パラメータについては、正で有意に推定されているため、結婚に積極的ではないと解釈することができる。これは、アンケートの対象者が大学生であるため、結婚するということが現実的ではないのであろうと予想される。ASC 3の標準偏差パラメータについては、どのケースにおいても有意に推定されている。したがって、結婚したくない理由については様々であると予想される。

愛大生と松大生全体で、いくつかの属性パラメータについて差があることがわかった。愛大生のほうが、性格（明るい自分勝手）、学歴（大卒（普通大学））、顔（Level 2）を重視し、料理（上手）については松大生のほうが重視

する。これらのことから、愛大生のほうが結婚相手に求める条件が厳しい可能性がある。学歴（大卒（普通大学））については、男女ともに愛大生のほうが重視していることがこれまでの分析から明らかになっている。これは、愛大生と松大生の普通大学の認識の差に由来しているかもしれない。一般受験の結果、愛大と松大の両大学に合格すれば、一般的に愛大へ進学する傾向が強い。そのため、愛大生は愛大が普通大学、松大生は松大が普通の大学ではないという認識を持っている可能性がある。そのため、愛大生のほうが大卒（普通大学）をより重視するのもかもしれない。

顔（Level 2）については、特に愛大女性が重視しており、顔（Level 3）の結果と合わせると、愛大女性のほうが松大女性よりも結婚相手の条件として顔を重視していることがわかる。愛大は松大よりも女性の比率が高い。すなわち、松大女性は普段からより多くの男性を観察しているが、愛大女性は相対的に限られた男性を観察していると考えられ、自分の好みのタイプの顔を持つ男性を見つけることが困難な状況なのかもしれない。したがって、愛大女性のほうが結婚相手に顔をより強く求める傾向にあるかもしれない。ただし、顔（Level 3）については標準偏差パラメータが有意なので、愛大女性の中でも強く求めている女性もいれば、それほど強く求めている女性まで様々いる。

愛大男性は松大男性よりも優しくて明るい女性を求める傾向にある。料理（上手）については、松大男性が愛大男性よりも強く結婚相手に求める傾向がある。松大男性のほうが愛大男性に比べると県内出身者が多いため、自宅から通っている学生が多く、普段自宅で食事がでてくることが当然と思っているからこそ、松大男性は料理（上手）を条件として強く求めるのかもしれない。また、松大男性のほうが結婚相手には専業主婦になってもらいたいと考えているのかもしれない。記述統計量から交際経験のない愛大男性は31%、松大男性は27.8%である。交際経験のない男性の割合の多さから愛大男性のほうがより性格のよい女性を求める傾向にあるかもしれない。

## 6 お わ り に

本稿では、愛媛大学生と松山大学生の結婚相手に求める属性に差があるかどうかを分析した。結果として、大学間に結婚相手に求める属性の差があり、特に男性と女性に分類した場合、愛大男性については性格、愛大女性については顔をそれぞれ重視することがわかった。これらの結果は、愛大と松大の特徴、すなわち愛大生と松大生の男女比率、県内外比率、そして恋愛経験の差から生じているかもしれないことが明らかとなった。

今回は各属性に対しての限界効用 (Coefficient) は導出できているものの、それぞれのケースを限界効用を用いて比較分析をすることができない。比較分析をできるようにするためには各属性に対する支払意思額 (Willingness to Pay) を計算する必要がある。今後は、各属性に対してどの程度の差があるかを量的に比較することが課題となる。

### 参考文献

- McFadden, D. (1974) "Conditional Logit Analysis of Qualitative Choice Behavior," In P. Aarembka (ed.) *Frontiers in Econometrics*, 105-142.
- Revelt, D., and K. Train (1998) "Mixed Logit with Repeated Choice: Households' Choices of Appliance Efficiency Level," *Review of Economics and Statistics*, 80, 647-657.
- Train, K. (2003) *Discrete Choice Methods with Simulation*. Cambridge University Press.
- 今井靖親・森田健宏 (1996) "大学生の恋愛観・結婚観," 教育実践研究指導センター研究紀要Vol. 5、15-22.
- 加藤千恵子・柏木恵子 (2000) "成人前期の日本男性の結婚観・仕事観—インタビューおよびKJ法・最適尺度法による—", 発達研究、Vol. 15、51-78.
- 北村行伸・宮崎毅 (2009) "結婚の地域格差と結婚促進策", 日本経済研究、No. 60、79-102.

栗山浩一・庄子康編著（2005）『環境と観光の経済評価—国立公園の維持と管理—』、勁草書房。

佐野まゆ・高田谷久美子・近藤洋子（2007）“大学生における性役割思考によるライフコース観の比較”、山梨大学看護学会誌、Vol. 6、45-52.

中井美樹（2000）“若者の性役割観の構造とライフコース観および結婚観”、立命館産業社会論集、No. 36、117-127.

遠藤公久・山根一郎・堀洋道（1990a）“大学生の結婚に対する意識(1)—性格特性の相性観について—”、筑波大学心理学研究、No. 12、85-91.

遠藤公久・山根一郎・堀洋道（1990b）“大学生の結婚に対する意識(2)—結婚観について—”、筑波大学心理学研究、No. 12、93-100.

三谷明美・赤井由紀子（2006）“高校生の結婚観と母性意識に関する研究—性差による比較—”、山口県立大学看護学部紀要、No. 10、39-43.